

30295

教科書文庫

3
810
41-1902
200030
1972

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

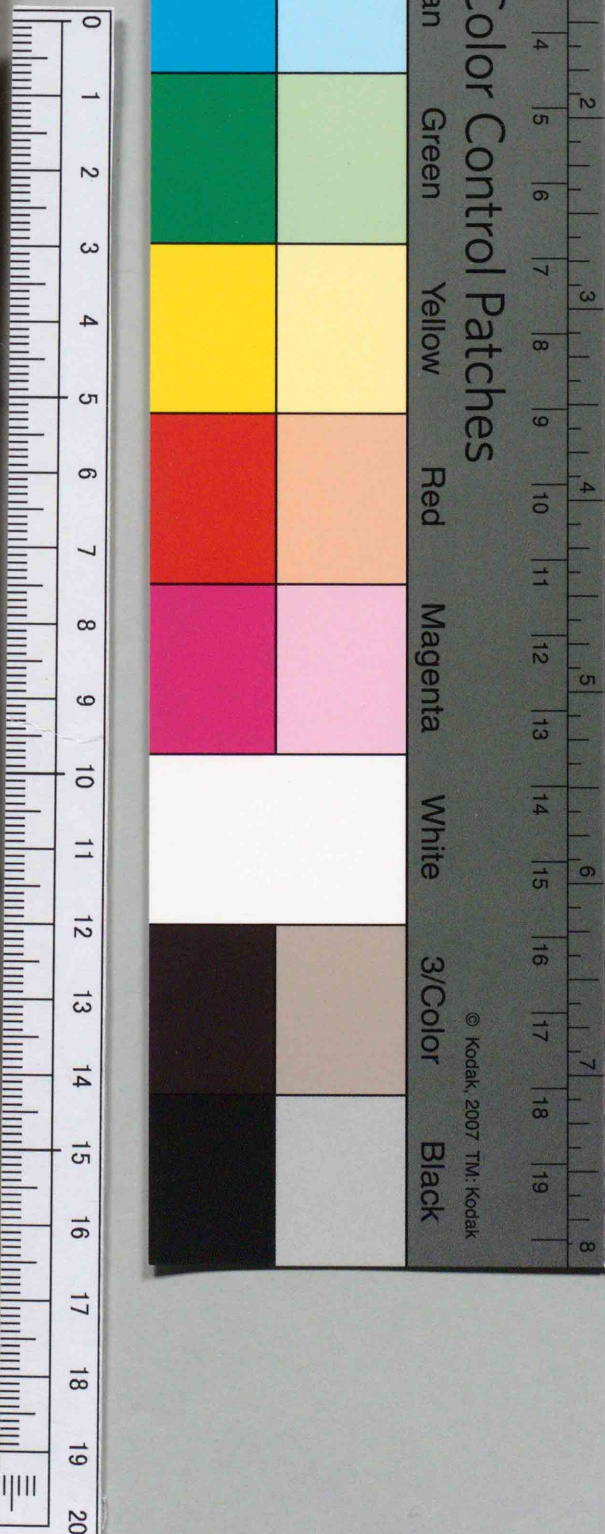


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

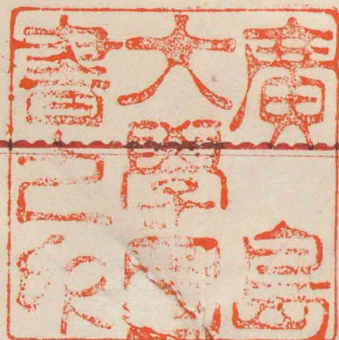


375.9
Oc8
資料室

中等國語讀本
落合直文編
卷六



3759
008



中等國語讀本卷六目次

- 一、日本國民の理想 その一……………一
- 二、日本國民の理想 その二……………五
- 三、日本國民の理想 その三……………一〇
- 四、學者の本領……………一四
- 五、人の心(今様)……………二三
- 六、大家……………二三
- 七、知己難……………二九
- 八、或人に與ふる書……………三七

九 小澤蘆庵と蒲生脩靜……………四一

一〇、 謫居雜詠(短歌)……………五〇

一一、 籠居雜詠(短歌)……………五一

一二、 岩倉公の逸事その一……………五二

一三、 岩倉公の逸事その二……………五九

一四、 岩倉公の逸事その三……………六三

一五、 逸話につきて……………六九

一六、 貝原益軒……………七四

一七、 湊川……………七八

一八、 古戰場(今様)……………八一

一九、 關原懷古……………八一

二〇、 甲冑堂……………八六

二一、 アレキサンドル大王の逸事……………九〇

 その一……………九一

 その二……………九五

 その三……………九七

 その四……………九九

二二、 高島秋帆……………一〇〇

二三、 著譯……………一〇五

二四、 わが遭厄……………一一〇

二五、 畫工と花賣……………一一七



中等國語讀本卷六

一、 日本國民の理想その一

わが親愛なる少年よ、空想を討こゝに、御身等に語るべき、一の昔話あり。

いつの頃にかありけむ、うちつゞく不幸のために、亡びたる國あり。その都府なりしところも、今は、零落して、荒れ果てたる一の村落となれり。その村落のはづれに、岩石より成れる山あり。山の一角、何人の刻み

たるともなく、木のづから、大なる人面の如くなりしが、國人相傳へて、この岩石の容貌かたちに似たる人來らば、初めて、この國の零落を救ふを得べし」と語り囃ウラせり。こゝに、一人の少年あり。いとけなき時より、この國の昔の繁榮を聞きて、今の零落と比較し、慷慨くわいの情に堪へず、志ば志ば、郊外に出でて、この岩石に似たる人や來ると、待ち受けたり。かくの如きもの、十數年にして、やがて、少年は、才德兼備の人物となり、國人に推されて、政事を擔當し、經營苦心の末、つひに、その國を零落の淵より救ひて、昔の繁榮のありさまに、回復せしが、

その時は、はや、少年の容貌、かの岩石の容貌に似てありきとぞ。

こは、これ、必ずしも、岩石に似たる人ありて、初めその國を救ひ得べしと、いふにはあらず、國を救ふをもて、その理想とする、非常の人物、出で來りて、後、この國も救はるべしとの、意味なりしなり。志かして、この少年は、この昔話に感じて、これを、理想としたるがため、志らぬまに、容貌の、岩石に似たるのみか、その志望、才幹も、また、木のづから、發達して、國を救ふほどの英雄となり得たるなり。人のもてる理想が、いかに、その

人物に感化をたよぼすかは、この談話にて、明に、解し得らるゝならむ。

「然り、われ等は、古の英雄、君子を理想として、われ等の志を勵さむ」

よし、御身等に、理想の人物あるが如く、御身等の國にも、理想の國なかるべからず。御身等は、いかなる國を、理想として、御身の國を、進ましめむとするか。

「われ等は、わが國が、大國民たらむことを欲するなり」

よし、大國民は、善美なる理想なり。然れども、御身等

は、大國民とは、いかなる國なるかを、今少しく、慎密に、考へざるべからず。

二、日本國民の理想その二

大國民とは、必ずしも、領地の大なるものをいふにあらずして、その文明の發達の、高等に達したる國をいふ。文明の發達の、高等に達したる國とは、交通は、便利にして、生活、安樂に、風俗は、善美にして、歡樂の方法、備り、衛生の注意は、行き届き、生命財産の安全は、保たれ、人民の氣風、高尚にして、禮節あり、正大にして、勇氣

あり、沈重にして、事に勉め、志かして、理化學の眞理の、
ますます、究められて、世に、背理迷妄のこと、すくなく、
内にたいては、人の權利の重ぜられ、人の義務の守ら
れ、外に向ひては、國の權利の守られ、國の義務の遂げ
らるゝをいふ。

故に、大國民たらむと欲せば、教育を重ぜざるべか
らず、教育は、人民の智見をひろめ、思慮を練り、國民を
して、自主の民たり、人の子弟たり、國の人民たる道を、
悟らしむるものなり。

大國民たらむと欲せば、工藝を重じ、勞作を尊まざ

るべからず。工藝は、國を富し、生活を安樂ならしめ、勞
作は、人民をして、沈重勉強の氣習を、養はしむるもの
なり。

大國民たらむと欲せば、また、科學を重ぜざるべか
らず。天地の間に、一定の自然法あり。人類の進歩と幸
福とは、たゞ、この自然の理法に従ひ、自然の勢力によ
りて、はじめて、得らるべきものなり。科學は、この理法
を教へ、この勢力による方法を、發見せしむるものな
り。

大國民たらむと欲せば、また、文學と美術とを重ぜ

ざるべからず。學術が、天地の理法と勢力とを發見するが如く、文學、美術は、天地の美を看取して、これを、人類の快樂に供せむとするものにして、以て、人心を快易ならしめ、以て、人心をタカシク崇高ならしむるなり。

大國民たらむと欲せば、また、善美なる習慣、清潔なる風俗を作らざるべからず。いかなる善政ある國も、淫蕩懶惰の惡俗のためには、亡ぶることあり。いかなる惡政ある國も、良風善俗のためには、亡びざることあり。善政、いまだ、必ずしも、薄俗を移す能はず、善俗、なほ、以て、惡政を救ふに足るとは、この謂なり。志かして、

善美清潔の習俗は、人民が、剛健、勇敢、忍耐、自信、仁愛等の徳性を重ずるより、成るものなり。

大國民たらむと欲せば、また、國人の張るべき權利と、守るべき義務とを、重ぜざるべからず。權利を重ぜざるは、奴隸の民にして、義務を守らざるは、亂國の民なり。奴隸、亂民は、幾千萬人あるも、以て、大國民たることは能はざるなり。

大國民たらむと欲せば、また、貿易を盛ならしめざるべからず。わがあるところを以て、他のなきところを補ひ、彼のあるところを取りて、わがなきところを

補ふは、人類社會、共同の通義にして、貿易は、即ち、これを爲すものなり。

大國民たらむと欲せば、また、軍備をかるべからず。萬一、他國より、わが國に向ひて、暴虐不正を加へたる場合に、わが名譽と權利とを回復し、世界の至るところ、いづこにゆくも、横行濶歩して、他の侮蔑を受けざらしむるは、わが軍備の力なればなり。

三、日本國民の理想その三

志かして、大國民たらむと欲せば、殊に、公德を養は

社會公衆の對する徳

ざるべからず。御身等は、御身等の親戚朋友中の老人が、能く、語るところを聞きしならむ。

或人、家屋を新築し、室内を粧飾し、器具を整頓し、善を盡し、美を盡して、友人の批評を求めたり。一友人、口を極めて、その善美ならざるところなきを稱賛し、さて、後に、「たゞ、一の缺點あり」といふ。主人、その缺點は、いづこかと、いへば、友人、主人の品格の低きこと、萬事を俗了すと、いひたりといふにあらずや。

今や、日本人民は、立憲國なる、新しき建物を建築したり。然れども、これが主人たる人民にして、立憲人民

たる公德なくば、その建築も効なからむ。公德とは、なにぞや。社會公衆に對する道德をいふ。親に孝に、兄に悌に、妻を愛し、弟妹を慈むが如きは、人々、家庭の内に行ふべき當然の道德にして、これ等の道德を有したりとて、道德は、盡きたりといふべきにあらず。立憲國の人民は、この外、更に、社會の結合を固くし、國家の進運を助くるに足るところの道德を有せざるべからず。自家の子弟を教育するは、父兄としての職分なり。この職分の念を、更に、公衆の教育にねよぼすは、公德なり。親戚朋友を助くるに、金錢を以てするは、私徳な

り。これを、公衆にねよぼすは、公德なり。政治上にねいて、最も、善良なる主義を有すと信ずるものに、投票するも、公德なり。國家人民の福利を助くるに足ると信ずる議論を助けて、財本と時間とを費すも、公德なり。公衆を喜ばするため、植ゑられたる、堤上の花を折らざるも、公德なり。御身等が、他日、政治の局に當る日、節義、體面、主義を重じて、進退を、かろろしくせざるも、公德なり。已に、反對する黨派といへども、これを、窘迫せずして、寛容するも、公德なり。人民より撰舉せられて、府縣町村會の議員となり、もしくは、帝國議會に

出でしときに、あらゆる力を費して、その善とすること
ころを、主張實行するも、公德なり。政治上、社會上の不
義不道を見て、容赦なく、これを、攻撃匡正するも、公德
なり。御身等が、この立憲政體を擁護せむがために、力
を盡すも、公德なり。

親愛なる少年よ、御身等は、大國民の民たるを思ひ
て、ことに、この公德を忘るゝことなかれ。(竹越與三郎著國
民讀本抄録)

四、學者の本領

古の學者は、他の國々の書を讀むことも博く、志た
がひて、他の學術教法をも、講究したれども、決して、日
本學者たる本領を失ひたることを聞かざるなり。そ
の中にも、眞正に、日本學者たる本領を失はざる學者
といふべき者は、菅原道眞、大江匡房、北畠親房の三公
ならむか。

道眞公は、菅原氏にて、代々、文章博士の家業を傳へ
られたる家なり。されば、その讀まれしところ、學ばれ
しところは、もとより、漢土の經籍なりしこと、疑ふべ
くもあらず。かつ、そのころは、わが邦の史傳も、すくな

く、律令格式とても、多からざりし世なり。もし、それが
 ために、本心を失ふことならむには、とくに、漢土人に
 化し去らるべき理なるに、公は、決して、然らず、その學
 問こそ、漢籍によられたれ、その文章こそ、漢文をかゝ
 れたれ、その身の、朝廷に仕へまつりて、聖主宇多天皇
 の叡慮を奉體し、力をつくし、心をくだかれたるとこ
 ろを見れば、徹上徹下、純一純粹の日本心にて、一點一
 毫も、漢土風のけがらはしきことなし。ことに、わが神
 聖なる國體をたふとび、相門の權勢をたさへむと、謀
 られしことは、歴史上に、明なることなり。これ、その學

問せられしところは、漢籍、漢文なれども、すこしも、こ
 れがために、本心を取り失はれず、全く、舊來の日本心
 を維持せられたるものにて、これをこそ、日本學者の
 本領ある人といふべきなれ。公にして、もし、その本心
 を失ひて、儒家に耽溺せられたる人ならむには、かの、
 相門の隆盛をも、漢土の禪讓ゼンニョウなどになぞらへて、少し
 も、怪まざるやうのことなしともいひがたかるべき
 に、いさゝかも、さるけがらはしき行はなく、かへりて、
 これがために、寃罪に陥りて、遠國に謫タクせられたるな
 ど、實に、學者の手本とすべき人ならずや。
ソコノコトヲシテオホクシキコトナリ

次には、匡房公なり。この人も、累代の儒家より出て、
儒業を以て、及第立身せられし人なり。されども、その
皇家に奉仕せられたる、一代の所業を考ふるに、實に、
敬すべきものあり。公、後三條天皇の東宮にましまし
しとき、その侍讀となり、かねて、天皇の勅旨をも知ら
れし故に、専ら、啓沃に、心を盡され、さしも、隆盛なりし、
藤原氏の大權をも、一朝に、皇家に回復せさせ奉りし、
そのころ、ざしのほど、思ひやるべきなり。さればこ
そ、天皇、即位のはじめより、藏人の職にありて、夙夜、陪
侍、機密の事に參與せられたるなれ。これ、また、その人

は、儒家に出でて、漢學者なれども、いさゝかも、日本心
を失はれざりしことは、知らるべきなり。されども、天
皇には、はやく、崩御ありて、その御志も、空しくならせ
たまひし故に、匡房公の忠勤も、世に、大に、顯れざるこ
と、はなれり。さはいへ、延喜已來、とり失はれたる政
權を、一時に、回復せられたることは、容易のことには
あらざりしならむ。これも、漢土風の心にて、深く、わが
國體をもれも、はぬ腐儒者ならば、必ず、袖手傍觀して
もあらるべき理なるに、さはなくして、かくの如き、忠
勤をいたされたるなど、これ、また、實に、日本學者の手

本とすべき人ならずや。

次には、親房公なり。この公は、儒門といふにはあらざれども、皇正統代々、文學を以て、世にきこえたる、北畠氏の家に生れられたれば、儒學にも、佛學にも、深きことは、勿論、古今に稀なる學者なり。かの後醍醐天皇の思し召した、れたる、北條氏討滅の事につきては、はじめより、その謀議に參與せられ、ことさらに、出家して、武家の嫌忌を避けられ、竊に、謀議を助けられたること北條氏は、いふまでもなく、尊氏の、叛亂を企つるに及びては、志ば志ば、艱難にあたられ、その子息たちの、戰場に臨

みて、討死せられたるも、ねほく、終始、志を變ぜず、芳野朝廷のために、子房の謀をめぐらし、諸葛の忠をいたされたること、これ、また、歴史上、明なり。その忠肝義膽、孔明智略勇略のほど、千古に照映すともいふべからむ。もし、この公も、儒家に耽溺せられたる人ならむには、かの湯武の放伐などいへる、大惡事をも、口實として、尊氏に荷擔せらるゝが如きこと、なしともいひがたかるべきに、公は、決して、然らず、艱難辛苦の中に、身を終へられたるなど、これ、また、實に、日本學者の手本とすべき人ならずや。(内藤耻叟文稿抄録)

五、人の心（福羽美静詠）

にほふさくらは、春のいろ、
そめし紅葉は、秋の志を、
人のこゝろに、さく花は、
千とせの後まで、かざるなり。

六、大家

大家、大家。大家とは、そもそも、いかなる人ぞ。人に推
稱せられてなれるにや、はた、自ら、尊重してなれるに

や。何れの國、何れの世にも、大家といふものありて、ま
ことに、ありがたく、慕しく、うらやましきものなるが、
中には、また、おそろしく、氣味悪く、にくむべきも、少か
らず。

大家となりし人は、後進の士を引きたて、過あら
ば、教へ諭すべく、さても聽かぬをば、呵り懲こらさむもよ
かるべし。何事ぞ、大家の中に、少年の人をば、おしなべ
て、童孩の如く看做し、少しく、事業をなさむとするも
のあれば、慢心のものなり。年は、まだ、三十にも足らぬ
に、などと、のたまふは、それも、論の是非、業の善惡を見

たる後ならば、さもあるべし。後進の士に、君は何々の新著を讀み給ひしか」と問はれては、京城の紙價も、これが爲に、高くなりしほどの書にても、知らずと、のみいひて、顧みず。偶、一顧の榮を賜はるときは、劈頭一聲、「こは、分に過ぎたる業なり。かゝる事は、せぬものなり」などのたまふ。これらの大家の多きは、後進の士の爲には、さまで、害はあらざれど、一代の文學の爲には、歎かはしきかぎりならずや。

ギョオテが一代の文宗たりし日に、往いて、これを、ワイマルに訪ひし、ハイネといふ小詩人ありけり。彼

は、年ごろ、ギョオテの人となりを慕ひて、三とせ前には、一卷の詩を贈り、一とせあまり前には、一卷の悲壯劇を贈りて、推尊、至らざる所なかりき。彼のギョオテを見し時は、いかなる望をか懷きけむ、また、いかなる情をか齎しけむ。さるに、ギョオテが、この若者を遇せしさまは、極めて、冷淡なりきとねほし。ギョオテは、まことに、大家なりき。古今にわたりて、大家といはれて、耻しからぬ人なりき。この冷遇は、ハイネが、異教の家に生れしにやよりけむ、この詩編を、よくも、讀まざりしにやよりけむ、いな、たもふに、ハイネが年の若きを

蔑りて、かくは、もてなしたるなるべし。

ハイネが、望を失ひしさまは、彼が友人モオゼルの許へいひやりしことばにて、いちじるし。文に曰く、われは、ワイマルに來ぬ。こゝには、よき麥酒あり」と。彼は、また、ギョオテの事を忘れしにあらぬを示さむとにや、文の終に、重ねて記して曰く、われ、ワイマルに來ぬ。こゝには、よき燒鳥あり」と。ハイネが程へて、モオゼルに送りし書には、頗る、憤、恚の心をあらはしたり。曰く、「わが、ギョオテの事を、少しも、君にいひやらざりしも、わが、彼と語りしさまを、告げざりしも、彼が、われにい

ひし、やさしきことばと、惠深きことばとをかき送らざりしも、君に損ありと思はず。ギョオテは、今は、たゞ、昔、美しきもの、咲きし室むろなるのみ。これ、わが、彼を見て、面白しと思ひし、一ふしなりき。ギョオテは、われに憐の心をねこさせたり。わが、彼を不憫と思ひそめしより、わが、彼をめづる心は、深くなりぬ。されど、もとより、われとギョオテとの中は、あまりに、性の異りたれば、互に、相厭はざることを得ぬ中なるべし。云々と。また、八年の後、ハイネは、記して曰く、われ、ギョオテに逢ひし時、エナとワイマルとの途にて、食ひし梅の

子のうまかりしを語りぬ。冬の夜の永き頃に、わが彼に逢ひて、いはむとせし高尙なることをも、意味深きことをも、彼を、やうやうのれもひにて見し時には、えいはざりき。われは、たい、ザックセンの梅の、いと、うまきを語りぬ。その時、ギョオテは、微笑しぬと。

嗚呼、ギョオテは、獨逸の文學を代表するに足るべき大家なり。伊太利のダンテと並べ稱せらるゝ、大家なり。されど、彼が心の、あまりに高くあまりに傲りて、後進の士を冷遇せしが如き跡あるを、われ、いたく、惜めり。世の大家といはれむ方々は、心して、かゝる汚蹟

を、青史にレ留めたまひそ。(森林太郎著かげ草)

七、知己難

朋友にして、知己ならざるものあり。知己にして、朋友ならざるものあり。否、知己は、敵人にも、これあるべきなり。かの仲達が、祁山渭水の空營を按じ、天下の奇才なりと叫びたるを見れば、かの孔明の爲には、よき知己たりしにあらざや。孔明は、實に、二個の知己を有せり。敵としては、仲達、味方としては、玄德。人は、何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接

東屋のふにほひオ
コヒヨ梅の花
主要にして
春のな忘れ
引
世のふり
天の
回馬仲達
孔明の爲
諸将孔明
蜀の志

する日は、即ち、朋友の出で来る時なり。觸るれば、情を生じ、着すれば、情を生じ、久しければ、情を生じ、屢すれば、情を生ず。竹馬の友、同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友も、また、類多し。然り、天下、何人か、友たらざるものあらむ。すこしく、心をとめて、談話すれば、東京より、横濱に達する汽車中にてすら、幾多の友人を獲らるゝにあらざや。

知己に至りては、然らず、天下千百の朋友を得るは、やすけれども、一人の知己を獲るは、難し。知己とは、何ぞや。我よりすれば、彼より知らるゝなり。彼よりすれ

ば、我を知るなり。君ならで、誰にか見せむ、梅の花、色をも香をも、志る人ぞ志る。これ、實に、知己に對する情なり。知己、實に、難し。故に、一の知己を得れば、殆ど、一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひたるよりも悲し。鍾子期、死して、伯牙、絃を折り、荊軻、死して、高漸離、また、筑を撃たず。その心、まことに、あはれむべきものあり。

語に曰く、好漢、好漢を知り、猩々、猩々を知ると。同類相合し、同氣相投ず。知己の出で来る、これを以て、解釋するに足らむか。然れども、知己の感は、時に、その品性

の甚だ不相應に、資質の甚だ不平均なる間に出で來るものなきにあらず。北の政所の、太閤にわける、クビス夫人の、ビーコンスフィールド伯にわける、紅拂の、李衛公にわける、これまた知己にあらざるなきか。瓦盃、藁席の裡にわいて、既に、天下を一統する大英雄を識認し、一篇の小説はやくも、蛟龍、雲霧を得る大政治家を看破し、半壁の燈影はやくも、その稀世の豪傑たるを會得す。情、眞なるか、ゆゑに、眼、明なるか。眼、明なるが故に、情、眞なるか。その交感の消息、實に、傍人の解すべからざるものあり。

か知己

楊巨源の詩に曰く、詩家清景在新春、柳嫩鶯黃色未

勻、若待上林花似錦、出門皆是看花人」と。龍を見て、龍となす、難きにあらず、一寸の蛇を見て、はやくも、その雲を起し、霧を吐き、茫洋として、玄間を窮め、日月に薄るを知る、これ、難きなり。知己のかたきは、その、いまだ、發達せざる時にわいて、他日の發達を、卜することの難きにあり。そのあらはれたる、嘻笑怒罵の外に、かくれたる胸間の神秘を、會得することの難きにあり。人、その半身以上は、秘密なり。知己は、よく、鍵なくしてこの秘密を知れり。もとより、他の、我に向ひて、語

ノワカメが
鳥カキハ
ヲ見ル時ヤ
未キモイ
ナ花トナリト
ソトナリ見ユ
ンダ、カ知ヒ

ヲ知カ知ヒ

るを待たざるなり。語るを待ちて、これを知るが如き、これ、豈に、知己ならむや。劉禹錫の、白樂天に贈る詩に曰く、尋常相見意殷勤、別後相思夢更頻、每遇登臨好風景、羨他天性少情人」と。それ、一の好風景を見てすら、なほ、その知己を憶ふ。いはむや、人の死生の間に處してをや。東坡曾て、獄に投ぜられ、その重辟に處せられむとするを聞き、その弟、子由に贈りて曰く、是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神、與君世々爲兄弟、又結來生未了因」と。その同胞の情もとより篤し。いはむや、これに重ぬるに、雙々知己の恩愛を以てするにわいてをや。死

後、なほ、兄弟となり、その未了因を繋がむといふ。世の、兄弟にして、かくの如き知己の感あるもの、古往今來、それ、いくばくぞ。

知己は、敵人にあるのみならず、生面の人にもあり。或は、古人に對してもあり。知己の交感は、時を問はず、處を論ぜず。賈生が、屈原を慕ひ、孟軻が、孔子を慕ひ、而して、孔子が、周公を慕ひて、我、また、夢に、周公を見ずといひしが如き、その言の、濃到深切、感すべきにあらずや。シセロ曰く、余に對しては、シピオ、なほ、生けるなり。而して、常に、生くべし」と。嗚呼、宇宙茫茫、たゞ、知己あり

て、以て繋ぐところあり。知己なくば、人生は、荒野のみ。
荆棘のみ。

人は、知己のために、その憂苦患難を、ともにするを厭はず。甚しきは、その一身を投じて、知己のために、犠牲となるものあり。彼等は、漫に、犠牲となるにあらず。實に、知己のために、犠牲となるなり。苟も、一の知己を得る、生命を捨つるも悔いず、いはむや、區々たる浮世の名利をや。魏徵が、人生感意氣、功名誰復論と、いふ句は、實に、人の深奥なる思想を、吐露したるものなり。

人生の、最も、清福なるは、知己を有するにあり。朋友

中、知己を有するは、最も、清福なり。而して、その兄弟、姉妹、父母の中に、知己を有するは、最も、大なる清福なり。それ、風雨の夜、兄弟、床を對べ、以て、千古の懷を叙づ。天下、また、これに優る清福あらむや。（徳富猪一郎著靜思餘録）

八、或人に與ふる書

先夜は、參上、御意を得、ことに、柿餅の御饗應、忝く、存じたてまつり候ふ。その節は、折あしく、他人來合せ候うて、用事の談話、申しつくさず候ひき。さて、拙者儀、かねがね、申し、如く、歷代帝王の山陵、久しく、荒廢して、

御祀もすたれ、なかには、その所在すら、明に、知れずなり候ふものも、これあり候ふ間、尋ね求め候へども、なほ、遂げず候ふ。この度、林大學頭殿へ申し入れ、その使として、本月六七日までに出府、それより、遂に、上京仕るべく候ふ。これ、一天の君、世々に御祀ありて、尊崇すべき第一義に候へども、亂世以來、法壞れ、今、治平二百年にたよべども、上に、さまでの有識、これなきにつき、たゞたゞ、等閑にあひなり候ふこと、幸に、當今、御老中伊豆殿をはじめ、大學殿、いづれも、皆、一代の賢才に御座なされて、御政教を勤め給うて、延喜天曆の昔にも

劣るまじく候ふ。この時にして、その一二の闕を補うて、忠功を達する事、拙者、多年の願に候ふ。これにつき、江戸にて、親しき二三の御旗本にも、四五兩は得べく候ふ。また、佐野、鹿沼など、師友の間にて、衣服、腰の物の支度を致させ、數年浪々の拙者、やうやう、眞の武士にまかりなるべく候ふ。志かれども、關東より千里、西遊六七十日の物入に候ふ間、金子十兩拜借仕りたく候ふ。この儀、先日、申し入れ候ふ節、御承知なし下され候ひしが、猶、金員數は、志かと、申し上げず候ひしゆゑ、更にかくの如く申し上げ候ふ。昔、商人にも、義を好み申

山川屋
儀兵衛
山野屋
利兵衛
後京都
寺入り名
ヲ改メテ十

す者は、奥州の金賣吉次が、九郎義經にわける、山川屋儀兵衛が、大石内藏之助にわける、この外に、金を輕じ、忠義の名を立てつる者、たほく、御座候ふ。この度の儀、拙者も、雪霜の寒を犯し、旅行すること、貴公にも、御推察下され、御承知にて、御貸し下され候はゞ、これまた、天下第一の義舉にて、忠感、定めて、神明に達し候はむ。かつ、貴公は、拙者にわける母方の姻親にて、千金を蓄へて、もとより、一郷の良と聞きたれば、拙者、外に求めずして、直に、貴公に御頼み申すことに候ふ。不備。(蒲生

秀實書翰寫)

九、小澤蘆庵と蒲生脩靜

蒲生脩靜、山陵訪求のために、京に赴きし時、かの地に、絶えて、知る人なし。時に、小澤蘆庵は、古學を好み、萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりと聞きしかば、彼が助を借らむとて、やがて、蘆庵が宿所をたとなふに、そが僕、出で迎へて、「いづこより」と問ふ。いひよるよしもなきまゝに、先づ、伴りて、某は、下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎といふ者なり。琴を好み候へども、田舎には、よき師なし、主人の翁は、琴の

妙手にてはするよし、東野のはてまで隠れなし。これにより、御弟子にならむと欲して、はるばると來つるにて候ふと、いふ。その僕、心を得て、奥に赴き、志か志かと告げしに、蘆庵は、聲を高くして、あな、無益にも、訪はるゝものかな、汝、出でて、志か答へよ。主人は、久しう、客を辭し、交を絶ちたれば、都のうちだにも、親しうものせるは、稀なり。琴は、若かりし時、かきならしたりけるを、遠近の人に知られて、かれに聽かせよ、これに教へよといはるゝが、うるさければ、近頃、うち擡きて、薪に代へたり。かゝれば、所望に従ふべくもあらず、他に

行きて、求め給へといへと、いふ。脩靜は、僕が報ずるをも待たず、翁の御答は、こゝにも、つばらに、洩れきこえたり。某、なほ、一言あり、願くば、枉げて聞き給へ。われは、下野の儒者なり。志か志かの志願ありて、志ば志ば、江戸に遊學し、こたび、都に上りしかども、相識れる者、絶えてなし。翁の、古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬとは、かねて、傳へ聞きしものから、いひよるよしのなきまゝに、琴を學ばむとて來つとは、いひしなり。こは、長者を欺くに似たれども、そのそら言は、已むことを得ざるより、出でたるなり。今一度、わ殿を勞せむ、こ

のよし、取り次ぎ給へ」といふ。蘆庵も、これを、洩れ聞き
て、ざりとは、思ひがけざりき。そは、珍しき客人なり。對
面せずば、くやしきことあらむ。こなたへと申せ」とて、
やがて、面を合せけり。脩靜、深く歡びて、早くより、思ひ
起し、志願のよしを説き示し、山陵志著述のために、
古き陵を尋ねむとて、旅寢を去つることの趣など、語
り出づるに、蘆庵、ひたすら、感嘆して、足下は、得がたき
學士なり。さる志ならむには、わが庵に、杖を留めて、こ
ゝらあたりの陵を、靜に、探求し給へ」とて、又、他事もな
く、もてなしけり。

これにより、脩靜は、日毎に、古陵を尋ね廻るに、とも
すれば、日暮れて歸るを、あるじは、いつも、自ら、風爐を
焚きて、入浴せさせ。脩靜、その心遣を、胸苦しとて、辭み
しかど、これらの事は、ひたすらに、客を愛するのみな
らず、足下の如き、國のために、力を盡す人の疲勞を、い
さゝかなりとも、うち慰めむの心のみ、必ず、辭み給ふ
な」とて、後々までも、志かしてけり。かゝりし程に、脩靜
は、ある夜、更たけて、子ふたつのころ、歸りしに、蘆庵は、
未だ、いねず。例の如く、入浴せさせ、飯をすゝめ、さて、い
ふやう、われ、足下を宿せる日より、蔬菜の外に、物もな

く、させるもてなしをばせざれども、老僕を憩はせむとて、手づから、風爐をさへ焚くを、思ひくみ給はずや。古陵をたづね巡ればとて、今までは、用なからむに、道草くうてか。老人に、物を思はせ給ふこと、心得がたしと、呟く。脩靜、聞きて、容を改め、翁のうらみ理なり。わが非を飾るにあらねども、更たけたるは、いさゝかゆゑあり。懺悔のため、笑に備へむ。今日は、某の天皇の陵をたづねたりしに、日くるゝまで、たづねもあはで、思はずも、等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年頃のうらみ、心頭に起りて堪へられず、墓に向ひて、罵

るやう、梟臣尊氏、靈あらば、今いふことを、たしかに聞け。汝は、一旦、治りたる建武重祚の世を亂して、逆に取り、逆に守り、毒を、後世に流しゝより、二百十數年、干戈をさまらず、國の舊典も、ために、燒亡し、王室も、これによりて、いやしく、歴代帝王の山陵すら、迹なくなりて、われらにさへ、飽くまで、物を思はするは、皆、これ、汝が罪なり。天罰、思ひ知るべしとて、杖をもて、石塔を、思ふがまゝに、うちたゝきぬ。かくて、寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道の邊の酒屋に立ちより、怒にまかせて、飲みし程に、六七合を盡したり。さて、酒屋をば

出でしかど、酔ひて、足も定らず。このまゝにて歸らば、必ず翁に叱られむ、なかば醒して行かむと、株に尻をかけしより、うまいや、志けむ、驚き覺むれば、はや、更たけたり」と、語るに、蘆庵は、噴きいだし、呵々と、うち笑ひ、「さて、世には、似たる馬鹿ものもあるものかな。われも、いぬる年、ある日、靈山のほとりに、逍遙して、長嘯子の墓所を過ぎし時、さすがに、宿恨なきにあらねば、ゆきもえやら、ず、にらまへて、長嘯子、不滅の罪あり。わぬし、みづから、これを知るや。わぬしは、豊太閤の外族として、位高く、かつ、采地も、廣かるに、心ざま、武士に似ず、

伏見の籠城に、敵の旗色を見て、鬼胎を抱き、鳥居元忠等を棄殺にせしは、不義なり。事平ぎて、罪を蒙り、わづかに、命を助けられしを、幸にして、耻を知らず、心にもあらぬ世捨人がほして、えせ歌多く詠じたる、一盲、衆盲を引きしより、歌の志らべのわろくなりて、今に至るまで、なほらぬは、これ、不滅の罪にあらずや。冥罰、かくの如くならむ」と、罵りながら、杖をあげて、墓を毆ちたることありけり。こは、よく、似たるにあらずや」と、語りもあへず、聞きもをほらず、ひとしく、腹を抱へきとぞ。(瀧澤馬琴著兎園小説)

一〇、 謫居雜詠（三條實美詠）

○

あききぬと、わちたる桐の、ひと葉にも、

まづこぼるゝは、涙なりけり。

○

かりそめと、たもひし宿の、はなすゝき、

今年もわれを、招きとめたり。

○

かくばかり、うきをかさねし、袖ぞとも、

あらでや秋の、露はれくらむ。

一一、 籠居雜詠（岩倉具視詠）

○

今はとは、たもひきれども、くろかみの、

亂れて筋も、わかれざりけり。

○

秋の夜の、こよひいかなる、こよひにて、

ひとり野寺の、月を見るらむ。

○

さまさまの夢こそみゆれぬるまさへ、

人に變れるわが身なるらむ。

一二、岩倉公の逸事その一

月日の小車はめぐりめぐりて、流るゝ水よりもはやく、故右府公の世を去り給ひしより、今は、はや、十年あまりぞ過ぎぬる。大詔のまにまに、わが國を、富嶽のやすきに置かてやはと、思ひ入り給へる、公の一筋の誠心は、天地の間に充ちわたりて、きはみなき。後の世まで、語りつぎ聞きつぐべければ、今更に、いふまでも

なき事ながら、公の逸事の二三を思ひ出づる儘に、書き記して、後の鑑ともし、史人の料にもせむとす。

維新のはじめに、神武の古に復るといふ、大義を定められしは、この公の輔翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の説に、建武中興の振はざりしは、當時の搢紳に、その人なきによれり。源親房卿は、學識ありて、時の帝の御ねぼえもめでたかりしかど、その人の所見は、延喜天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ、公家武家の間に、隙を生ぜしなれ」といへり。

故右府公は、搢紳有職の家に、生ひ立ち給ひしかど、夙に、大勢を達觀して、王政に、公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、神武の古に復るといふ、一大義を唱へ給へるは、これぞ、明治の朝廷に人ありとは申すべき。その一大義は、百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節は、すべて、破竹の勢を以て、破れたり。世の人は、明治の中興は、五百年來の武門の政を、破りたるなりと思ふらめど、心ある人は、溯りて、天平以來の宿弊の、更に、破り難きを、破られたることゝ、知るならむ。

徳川氏の、大政を返上せし際には、公は、譴を蒙りて、久しき間、岩倉村に蟄居し、天日をも見給はざりしが、俄に、召によりて、夜中、參内し給ひけり。このをり、公は、一の大囊を携へて、宮門に入り給ひしが、囊中の文書は、皆、公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に、起草せしめられつる、復古經綸の策案なりき。

この時、大勢、尙、定らずして、物論、紛々たるに、公は、俄に、躬を以て、責に當り、從容應答して、雄藩の主も、ために、容を改め、朝議、大に、決するに至る。而して、大令、一度發して、外は、將軍を廢し、内は、攝關、議奏、傳奏を廢し、親

政の洪圖を、旬日の内に定め、後世、動すべからざる基礎を建てられたるは、實に、公の輔翼の力なり。就中、復古の第三日に、禁闈に、達文を掲げられて、女房の請謁を納るゝことを、痛く、禁止せられたるは、これぞ、數年の宿弊を除き、將來のために、一大美事を遣したるなる。とて、公の晩年に、親しく、物語し給ひき。この一事は、扇の要なりとは、知る人ぞ知らむ。

玉松操は、一の偉丈夫なりき。平生、聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂とし、夙に、神武復古の説を抱きぬ。偶、公に知られて、蟄居の一室を貸し與へら

れ、起居を俱にして、畫策するところあり。公は、玉松の功を推して、たのれの初年の事業は、皆、彼の力なり」とまでの給へり。薨去の前年に、一夕、ことさらに、余を召して、玉松の履歷を物語し給ひ、その人の功績を、空しくなせそ。書き記して、後の世の、かたりつぎの料とせよ」と、懇に、仰せられけり。この夜、余は、他の二人を誘ひて、俱に、侍りしが、その中の一人は、もれなく、公の物語を、筆に留めたり。たのれの功を推して、人に譲りたまふこと、大臣として、いと、めでたし。

その後、公の、朝廷に、勧めまゐらせ、斷然と、開國の國

是を執らるゝに及びて、玉松は、姦雄のために、誤られたり」との一語を、いひ放ちて、公のもとを辭し、召されても、更に、應ぜず、一室に、屏風をたて籠め、その中にて、讀書に、日を送りけるが、功を論じ、賞を頒つ日に逢はずして、世を去りぬるぞ歎かはしき」と、公の、の給ひし。公は、蟄居して、いましなから、その家の裏の隠戸より、人知れず、大久保、木戸、小松、廣澤等の諸名士を引き、内外の大勢を聞かれ、なとして、この時、すでに、鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は、露ほども、この事を知らざりけり。かれが、口惜しく、たもひつるも、こ

とわりなり。

一三、 岩倉公の逸事 その二

維新の後、公の翼贊の功は、明治の歴史と俱に、後の世に傳ふべきなれば、こゝに、書きつゞくる要なけれど、公は、たのれの勢を、露ほども、誇りがほに、人に語り給ふことなかりしほどに、史人も、得知らぬことぞ多かめる。世の人は、明治二十年と、二十二年との、條約改政中止の件をば、何某の盡力にて、となりし、かくなりしなど、事々しく、いひはやせど、この事のたこりは、十

五年にて、公は飽かず思し召すことありて、一方ならず、心を盡し給ひ、そのをり、一たび中止とはなりぬ。されども、公は深く、秘め給ひて、文書一箱ほどもあるを、家に藏めて、出さざりしかば、内々の人ならでは、え知るものなかりき。これ等は、後人の鑑にこそ。

剛膽は、政事家の第一要徳なりとぞきこゆる。公は、長袖の人とも覺えぬばかりに、剛毅の徳を備へたはしけり。征韓の議、今にも、蕭牆の内に、變亂を見むとする時に、陸軍將校の中にて、武勇のきこえある一人は、公の邸に參り、客室に謁見し、一應、二應、議論の末、その

人、怒れる眼、血をそゞぎ、毛髮、倒に立ち、長き脇差を、左の手にて、鞘もたわむばかりに、握りつめ、貴殿、もし、意見を枉げ給はずば、御身のため、あしかりなむと、いひ放ちつゝ、膝と膝との間、一尺ばかりにまで、つめかけたり。この時、公の家の侍ども、次の間に控へ居て、障子の隙より窺ひつゝ、あはやと、手に、汗を握りたりしに、公は、すこしも、動ずる色なく、自若として、その坐を守り給ひきとぞ、内の人の物語りし。

公の、かしこきあたりの御ねぼえ、殊に、めでたかりしは、世の人の知る所なるが、大君の御爲とならば、我

をわきて、人はあらじと、思ひ給へる、隠さはぬ明き心の深かりしは、これぞ、君臣、水魚とも申し奉るべきか。雲の上の事は、筆に載するも、かしくければ、洩しつ。

公は、大久保故内務卿と、心交、特に、深くわはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は、密々の往復、志きりなりしが、公の身の上、心もとなしとて、夜な夜な、年少き侍を遣して、守衛せさせつることありしを、公は、知り給はざりき。西南の亂、平ぎて後、兩公の間に、契り給ふ事ありしが、日ならざるに、大久保卿の遭難とはなりぬ。一日、公の物語に、世の人、大久保の志を知りたらむ

には、いかばかりか、悲み思ふらむ。維新のはじめの十年間は、創業撥亂の時なりき。是より後の十年こそは、内治を整理し、民利を進むる時なれとて、將來のために、大に、計畫する所ありしに、料らずも、かたみの言葉とはなりぬとの給へり。

一四、岩倉公の逸事 その三

公は、夙に、開國の國是を唱へ給ひつゝ、又、厚く、國體の基礎を重じ給ひ、晩年、公の奏上によりて、宮内省に、帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きこ

とを、世に知らせむための、はからひとどきこえし。

公は、勤儉の二字を、大政の本として、輔弼に、心をつくさせ給ひき。又、家を治むるにも、儉約を旨とせられ、台鼎の高き位に上り給ひし後も、岩倉村の蟄居の時をな忘れそとて、常に、公達を戒め給ひけり。薨去の前、家範を作り、後の世まで、守り文にせよとて、子孫に、遺し給ひしが、その附録一篇は、専ら、奢侈と遊惰とを戒め給ひ、重き病の床にましましつゝ、親しく、旨を授けて、侍ふ人に、筆執らせ給ひし條にぞある。一門の人々が、案文に調印せしは、七月十五日にして、薨去の前五

日なりけり。今はの際に、遺言ありて、たのれの墓石は、父君の墓石の寸法に準へよと、ありきとなむ。

公は、日に夜に、公の事にのみ、心を碎きて、寸時も、暇あらせ給はざりき。朝五時前には、目を覺し、侍やあると、聲かけさせ給ひ、今日は、何某をば、何時に召せ、次に、何某をば、何時に呼べ。又、明日は、何某に、朝何時に來れ、何某に、夕何時に參れと、記して、申し遣せなど、仰せられき。多くの公達は、父君の代筆として、文かくことに忙しかりきとぞ。

公の病に侵され給ひつるは、明治十六年の春なり

しも、後より思へば、十五年の比より、なにとなく、あらざらむ後の世の、心づくしの節々を、知る人に語らせ給ひしことぞ多かりける。同年の冬、ある人の許に、贈りたまへる書の末に、

さりとも、かきやる浦の、藻鹽草、

たがわりたちて、かつぎあぐらむ。

と、ありき。さきだつも、後るゝも、世の習とはいひながら、御國の爲に、行末を思ひやられし、公の心こそ、いとあはれなれ。

公の、平生の仰に、大臣たるものは、その身の進退に

よりて、節操を、二つにすべきにあらず。維新の功臣、晩節を全くせざるもの多きぞ、口惜しきことの極みなる。我こそ、躬を以て、人臣の標準は示さめとの給ひしが、病重らせ給ひし後、辭表を捧げむことを思ひ立ち給ひしかば、同僚の諸卿が、支へ止めまゐらせしも、聽き入れ給はず、是非にとて、歎き請ひ給ひしかば、上には、忝くも、誠ある意ばへを酌ませ給ひ、聞き届けさせ、厚き惠の御勅をさへ下し給ひけり。かくと承りて、公は、さしもに重き衾を押し退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急ぎ、家の子等を召し集へられ、今日こ

そは、病の輕きを覺えたれ、それ、杯まるれ」とて、酒を賜ひけり。人々、歡の色をなしたりけるが、さて、その翌日に、事、重らせ給ひぬるぞかひなき。今はの際まで、夢幻の間にも、おほやけの事のみ、心に掛けさせ給ひ、なからむ後の事までも、人もて、雲の上నికిこえ上げまゐらせられたりといふ。

余は、本末の序もなく、思ひいつるまゝに、書きつゝけぬ。あはれ、この文讀まむ人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草を、いや繼々にかつぎあぐべき丈夫の伴となりて、公の地下の靈を、百載の後にまでなぐさめ

よや。(井上毅著 梧陰存稿)

一五、逸話につきて

逸話は、文學の奢侈品なりといふものあり。その、徒に、好奇の欲を満足するに過ぎざると、その、文の簡約にして、懶惰なる讀者を悦ばしむるとを、そしれるならむ。然れども、大に、人間的原素を重ざる史壇に於いては、個人の傳も、また、大に、重すべきものなり。カーライル曰く、傳は、唯一の眞歴史なり」と。而して、吾人は、信ず、逸話は、傳の精髓なり」と。

史談中に、一個人の私事に關する、原素を挿むことは、大に、大事件の感銘を鋭うする益あり。然るに、その反對なる時は、史の趣味、索然として、殆ど、人間的色相を失ひ、乾燥枯槁のものとなる。故に、近世の史家は、殆ど、逸話的原素を利用せざるものなし。かつ、逸話的原素なければ、史上の人物、漠然として、明ならず。たとへば、經濟學者、アダム、スミスは、放心の癖ありきとばかりにては、誰か、彼がこの癖を、具象的に、了知する事を得む。されども、彼がある公文に連署する時、わが花押を認むべきところに、例の放心のあまり、丁寧マツマツに、前筆

の花押を模寫したりといふ事、又は、衛卒が、兵式にて色代せし時、われも、また、その例にならひ、兵式にて、會釋を行ひたりといふ事を讀まば、誰か、彼の放心を詳知せざらむ。マコーレーの博覽と強記とは、人、皆、知り。されども、彼が三歳の頃、手に麵包と牛酪とをとりながら、絶えず、讀書したりといふ事、又は、ホルランド夫人に、突然、手遊人形の濫觴を問はれし時、言下に、ペルシウスの詩句を引き、羅馬時代に、その物ありしよしを證したりといふ事を聞くに至らば、彼が博覽強記は、一層、争ふべからざる事實とならむ。

人は、豪傑の弱點を聞くことを、喜ぶものなり。逸話は、ナポレオンの粗暴、氣儘、疍癩をも露呈して、彼を小にし、彼を常人らしくなす、そのかほりに、また、後進の企望を鼓吹する効もあり。又、時としては、逸話によりて、卑しきをば、却つて、尊らし、大をば、ますます、大にするこゝとあり。ゴールドスマスを虚飾虚榮なりと卑めたるものも、彼が五兒をもてる貧婦をあはれみて、ただ、一枚の外なきフランケットを恵み、われは、席にくるまりて、寢たるこゝとありきと聞かば、彼を尊ばざるを得ざるべし。又、レンシングの大なるを知るものは、彼が

ウルヘンブッテルにての赤貧中に、道路に餓死せむとする、人と犬とを救ひて、これを、わが家に養ひし事ありきと知らば、ますます、彼を敬愛すべし。

吾人は、逸話によりて、大家豪傑とわなじ世に生息する感を生ず。また、これによりて、彼等の性質を明知することを得。たとへば、下に擧ぐる二つの逸話の如きは、その人が、自信の深きところ見えて、をかしからずや。

ある若き學生等、クロプストックを、そが晩年の隠棲に訪ひ、彼が著作中の一節を示し、その意味の解釋を

乞ひしに、クロプストック、つくづく見て、この意味は、我も忘れたり。されど、この一節は、わが作中、最妙のものなるを知る。御身等、刻苦して、その意を發見せば、こよなき學問となるべし」といひけりとぞ。又、英のヲオズヲオズは、文中に、詩句を引用するや、自作の詩句の外は、用ゐし事なく、かつ、常に、われ、もし、書かむといふ氣だにあらば、沙翁に劣らざる脚本を書かむことも、難きにあらずと、いひきとぞ。(坪内雄藏著文學その折々)

一六、 貝原益軒

貝原益軒嘗て、湊川を過ぎて、楠公の昔を追想し、公の梗概を片石に志るし、遺蹟を、永く、存せむとて、兵庫の富商にはかりしに、大に、賛しければ、碑文を撰びて、與へたり。こゝに、富商は、うち喜びて、石工にも謀りてありしに、益軒、俄に、その文稿を取りにねこせたり。文章の改^サ刪にもやと、そをかへし、に、やがて、また、いひ送りけるやう、余、思ふに、楠公の勳功、日月にもくらぶべきに、余の如き淺學の筆もて、碑文を記さむは、踰等なれば、この事は、思ひ止みぬ。鹿^カ忽なることを約せし罪は、許したまへ」といふ。益軒の篤實にして、謙遜なり

しこと、この一事を以ても、知らるべきなり。

益軒、姓は貝原、名は篤信、通稱を、久兵衛といへり。筑前の藩醫、寛齋の子なり。幼より、群兒のなす遊を好まざ、ひたすら、讀書を嗜みぬ。中年に及びて、京都に講學し、後、醫とならむ志をわこせり。

はじめ、陸王二氏の説を喜びしが、後、朱學に歸したり。心術をもて、後世に裨益せむと欲し、いさゝかも、名利に馳せず。故を以て、著書數百部、假字がきのもの多し。その見識、人の及ばざるところなり。益軒、子なし、兄存齋の子を嗣となす。正徳四年、享年八十五にて卒し

陸王二氏
朱學
心術
名利
見識
及ばざること

ぬ。益軒、令聞、一世に高かりしかど、常に、恭謙にして、身の及ばざること、をわそれ、吾無長人者、唯、恭默思道而已」と、いへり。

嘗て、海路より筑前へ歸る時、同船せる數輩、思ふがまゝに語りて、日を過し、一人の少年あり、傍に人なきが如く、揚々、經義を講説してやまず。益軒は、恭默、坐隅に居て、これを聽き、更に、一言をも出さず。客船、湊につきける時、各、その姓名郷貫を告げしに、かの少年、「貝原久兵衛」と、名乗れるを聞き、大に、慚愧して、その名をもいはずして、いづこともなく、遁げ去れりとぞ。

益軒、儒學の外に、殖産興業の事にも志あつく、農耕本草の著書も、また、すくなからず。詩をば、無用の閑語なりとして賦せざりしが、歌は、折にふれて、詠み出でたり。文章も、字を鍊り、句を構ふるは、儒者の文にあらずとて、辭の達するを以て、主とせり。その卒せむとする時の歌に、

來し方は、一夜ばかりの心地して、

やそぢあまりの、ゆめを見しかな。

(作者未詳本朝傳記)

一七、湊川

寛政十一年正月二十日、有明の月の影志らむ頃、湊川を渡る。この川は、昔は、船の浮寝せしさま、歌にもよめるに、今は、真砂のかぎり見ゆ。雨の、いたく、降りたらむ折にのみぞ、水は流れぬべき。

舟とめし、湊は川の、名のみにて、

さゞれのうへを、ゆく水もなし。

川よりをちの、坂本村といふところの田の中に、楠木正成ぬしの標の石あり。その頃の戦記に見えたるも、今日、このあたりにて、腹切りて、うせられたるよしなり。この石は、元祿の頃、水戸の君の、建てさせ給へる

なりけり。面に、嗚呼忠臣楠子之墓と、いふ文字見ゆ。

楠の木の、かれにし跡と思ふより、

あるしの石も、あはれなりけり。

うしろなる文は、舜水とかいひしから人の、参り居りて、書きけりとぞ。この正成主は、よき大將にて、世に勝れたる功績のありける事は、更にもいはず、帝に仕へまつりて、いとも、まめやかなりしに、その志遂げずして、早く、失せられたるは、口惜しとも口惜しきことなりけり。その當時を思ひ出づるに、知らぬ世の事を、れども、そゝろに悲しくて、涙のほろほろと、こぼるゝ

を、従者どもは、怪しとも見るらむよ。(藤井高尚著神の御蔭)

一八、古戰場(小杉楯郵詠)

いく世をふりし、ものゝふの、
かばねにむすや、草のはら、
雨ものすごき、ゆふまぐれ、
きつねか何か、こゑすなり。

一九、關原懷古

藤川に至りぬ。關屋の跡は、今、さだかならず。右の方

に、松尾山、や、離れて、左の方に、天満山見ゆ。關が原の驛に至れば、連れる山々、桃配、南宮山など、木立深く茂れり。慶長の昔を思ひやれば、いと、哀なり。えも去りやらず、去ばし、うち休ひて、こなたかなた、見めぐらすに、その當時かたぼえて、なにとなく、さしぐまるゝも悲し。石田三成が、豊臣氏のねとろへを、いたく、歎きて、關西の大名どもをかたらひ、さばかり、勢を振ひけむ。徳川氏を、うち滅さむと思ひ立ちけむ。雄々しさよ。故太閤の御魂も、あまがけりて、いかに、その志を嬉しと思ひ給ひけむ。軍の勝敗は、時の運にありて、戦の罪にあら

毛利家

ずとこそいへ、豊臣氏の衰へ行くべき時來れるは、せむかたなし。さりとして、はた、徳川氏の、この度の軍、不義なりとは、いふべからず。居ながら、關西の軍を迎へて、待ち戦ふべきにあらねば、こゝまで、うちのぼりけむ、さるかたに、いみじき智略といひつべし。唯、惡むべきは、かの松尾山にたて籠りけむ秀秋よ、己が養ひたてられし太閤の恩を忘れ、何の恨もあらざるべきに、秀頼親子の心をも思はで、など、徳川氏に方人かたよは去つらむ。ことわり知らぬ武士のならひなりとて、あまりなる心ぞや。その日となりて、戦は、西東の兵ども、皆、とり

どりに、敵を引きうけて、更に、ひまもなし。矢叫ヤノコの音は、
こだまをひびかし、流るゝ血汐チは、山川となりて、戦タケ酣タケ
になり、にけり。或は、進むもあり、或は、退くもありて、い
づれとも、未だ、わかぬものから、さばかり、思ひ入りた
りけむ心のほどもあればにや、ともすれば、西の方、進
みざまになりぬ。よきころなりとて、三成方より、烽火
をうちあげけり。かねて、いひ残し、南宮山の味方に
志らせつれど、更に、應ぜず。それを、いかにと思ふをり
しも、思ひがけぬに、かの松尾山より、ひた下りに、味方
の陣にうち入るものか、年月かけて、たばかりけむ心

も、皆、水の泡と消えはて、東の方の勝となり、にける
そのありさま、今も、見るこゝちぞする。あはれ、うち滅
されけるつはものゝ心よ、佛のいふらむ妄執ともな
りぬべし。君れもひの誠、今は、空しと見なしたりけむ
三成が心、さばかりと思ひやられて、いとこそ、いたま
しけれ。さるを、このぬしの心の程をも思ひ知らず、姦
臣ぞなど、あしざまにいひなすらむは、いとも、心うき
事なり。それも、徳川の世の程こそあらめ、今、誰に諛ウソひ
ての論とか。今日、こゝに來りて、思ひ出づるまゝに、吊
ひがてらとぞ。(飯田武郷文稿國文抄録)

二〇、甲冑堂

奥州白石の城下より一里半南に、齋川といふ驛あり。この齋川の町末に、高福寺といふ寺あり。奥州筋、近年の凶作に、この寺も、大破に及び、住持となりても、食物、乏しければ、僧も住せず、空寺となり、本尊だに、何方へ取り納めしにか、寺には見えぬ。庭には、草深く、まことに、狐鼻のすみかといふも餘あり。この寺中に、又、一つの小堂あり。俗に、甲冑堂といふ。堂のかきつけには、故將堂とあり。大さ、纔に、二間四方ばかりの小堂なり。

本尊だに、右の如くなれば、この小堂の破損は、いふまでもなし。やうやうに、椽にあがり見るに、内に、佛とてもなく、只、婦人の甲冑して、長刀を持ちたる木像、二つを安置せり。いかなる人の像にかと尋ぬるに、佐藤嗣信、忠信二人の妻なりとかや。その昔、義經、鎌倉殿の義兵をあげ給ふと聞き、秀衡にいとまごひして、鎌倉へ赴き給ふ時、佐藤庄司、わが子の嗣信、忠信を、御供にいだせり。その後、義經、京都へ攻めのぼり、平家を追ひたとし、一谷、八島などにて、さばかりの大功をたて給ひて、再度、奥州へ参り給ひし時、はじめ、つき従ひて出で

たりし龜井、片岡など、皆無事にて、歸國せしに、嗣信は、八島にて、能登殿の矢先にかゝり、忠信は、京都にて、義のため、命をわとし、兄弟二人とも、他國の土となりて、形見のみかへりしを、母なる人、かなしみ歎きて、無事に歸り來る人を見るにつけ、せめては、一人なりとも、この人のごとく、歸りなばなど、泣き沈みぬるを、兄弟の妻女、その心根を推量し、わが夫の甲冑を着し、長刀を脇ばさみ、いさましげに出でたち、只今、兄弟凱陣せりとて、その節を學び、老母に見せ、その心をなぐさめきとぞ。その頃の人も、二人の婦人の孝心をあはれ

に思ひしにや、その姿を木像に刻みて、殘し置きたりとなり。嗚呼、兄弟の人は、古今例すくなき忠義武勇の士なり。その人につれそひし婦人、また、希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも、世に、めづらしき事なり。余、この物語を聞き、この像を拜するに、そゝろに、落涙せり。かくばかり、人の鑑ともなるべき孝婦の像なれど、香花をたむくる僧なきのみか、小堂のかく、あれにあれはて、雨風をもふせぎかぬるを、たれ一人、あはれといひて、一錢の賽物をだに供するものもなきは、世には、忠孝に感ずる人のなきにや。このまゝにては、年月

に荒れ行き、つひには、跡かたもなくなりはて、これ等の事を語り傳ふる人もなきに至らむかと、あまりに、あはれにねぼえしかば、くはしく書きつけて、歸りぬ。(橋南谿著東遊記)

一一一、アレキサンドル大王の逸事

世に、功名心もたぬ人はなけれど、アレキサンドル大王ばかり、功名心つよき人は、また、なかるべきか。大王は、弱冠の頃より、既に、そのれそろしき功名心に驅られ、父王が、戦勝の報、王宮に達するごとに、まきりに、歎息の聲をもらして、嗚呼、父王は、われをして、功名の餘地なからし

めむとすと、かこち居たりきといふ。二十歳の時、父王の死後を受けて、マセドニヤの王位に即きしが、掌大の地もとより、その大志をみたすべくもあらねば、大王は、遂に、波斯征討の大軍を起せり。鋭鋒の向ふところ、前なく、亞細亞の全土、空しく、大王の馬蹄に委したりき。この戦役は、大王の史傳中、最も、興味あり、最も、光彩ある一節にして、その陣中の逸事、頗る、多し。左に譯出せるは、その二三に過ぎざれど、また以て、その一斑を知るに足らむか。

その一

小亞細亞の東南の端に、タルズスといふ町あり。チドヌス河、その中央を流れたり。一撃の下に、大王は、こ

ゝをも征服し給ひぬ。河水の見るから清げなりければ、王は、衣服をぬぎて、その中に入りて、浴し給ひしほどに、烈しき熱、急に、身中に起り、顔色、蒼白に、四肢、痺ひきて、仆れかゝり給ひ、僅に、侍臣に扶けられて、水を出で給ひぬ。頃しも、波斯王ダリウス、コドマヌスは、大軍を擁して、進軍の途にありければ、全軍の驚、一方ならず。いかにもして、大王の、一日も、早く、快復ましますむことを祈れり。されど、王の病は、ますます、重りに重りて、今は、侍醫の人々も、救ひまゐらせむ道なし」といふに至れり。

こゝに、心まめなる侍醫の、プイリップスといふがあらけり。王の病革れるを見て、いたく、心をやませたりしが、ほかに、救ひまゐらせむ道もなかりければ、彼は、遂に、最後の手段に訴へて、事を、萬一に決せむと思ひぬ。そのすゝめむとする薬は、頗る、危険のものなれど、この危険を冒すにあらざれば、遂に、救ふべき術なきをいかにせむ。かく、たもひさだめつゝ、その薬劑をとゝのへつゝありしをり、大王は、その信任し給へる大將バルメニオ將軍より、秘書を受け給ひぬ。書の大意は、王よ、プイリップスを信じ給ふことなかれ。彼は、波斯

王に、ふた心ありと見えたり。まゐらせむ薬こそ、危険のきはみなれ」とありけり。大王は、靜に、讀み終へて、そと、枕の下に推しやり給ひぬ。折しも、プリップスは、薬を捧げて、入り來ぬ。王は、右手に盃を取り、左手にさきの秘書を取りて、侍醫に渡し給ひぬ。プリップスの讀み終へし頃は、はや、王の薬を飲み干し給ひし時なりき。侍醫は、よしなき疑を解かむとて、口を開かむとせしほどに、王は、軽く、手を以て、これをとゞめ給ひ、余は、汝を信ず。事の結果は、汝の邪正を、明に、立證すべし」とぞ、宣ひける。薬効、空しからざりき。王の病は、直に、快復

の運に向ひぬ。三日の後、全く、病床を離れて、再び、馬背に上り給へり。これを傳へ聞きける將士等、みな、王の、物を疑ひ給はぬ赤心と、その大膽にして、決心あつきとに驚かざるはなく、ますます、畏敬の念をましたりきといふ。

その二

大王の、軍イッス市にわいて、波斯の大軍と戦ひ、激戦數合の後、波斯王ダリウスを走らせ、その妻子を擒にせり。波斯王は、その敗軍を收めて、アルベラのガウガメラに陣して、一步も退かず。終日の戦、波斯軍の鋭

鋒、殆ど、當るべからず。

この時、マセドニアの諸將は、大王に乞ふに、暫く退いて、その兵を養はむことを以てせり。されど、大王は、頑として、聽き給はず。夜に入るとひとしく、靜に、臥床に上り給ひて、鼾聲カハまことに、雷の如し。翌朝、パルメニオ將軍は、王の側近くよりて、ゆり起しつゝ、さても、王は、勝軍のあとのごと、やすらかに、眠り給ふよと、いへば、王は、徐に、頭を上げて、汝は、我が軍の勝てるを知らざるか。見よ、ダリウスは、直に、わが掌中に落ちむとぞ、宣ひける。大王の大膽なる、概ね、かくの如し。

その三

翌日の戰、波斯の全軍、殊死して戰ひ、その勢、實に、當るべからざりき。されど、マセドニア軍の進退、よく、その法にかなひ、最後の勝利は、遂に、大王の上に落ちぬ。ダリウスも、今は、遂に、退軍のやむなきに至れり。マセドニアの軍、これを追ふこと、頗る、急なり。やがて、沙漠の中に出でぬ。さすがのマセドニア軍も、連日の戰に勞れて、今、この一望きはみなき沙漠の中に出でければ、その困苦、いふべくもあらず。全軍、渴すること、はなはだしけれど、あはれや、そこには、一滴の水も、あらざ

りけり。

こゝに、一兵士の少許の水を見出したるがあり。彼はこの貴き水を、われひとり飲むに忍びず、胃の鉢に盛り捧げて、恭しく、大王の馬前に進めり。王は、こゝちよげに、その兵士に肯き給ひ、汝の厚意は、こゝろよく受けむ。されど、われひとり、渴を醫するに忍びむや」とて、それを地上に、うちあけ給へり。王の、この同情の心は、いたく、全軍の將士を感激せしめ、見よ、大王の、我等と苦を共にし給ふを。かゝる王に従はむこそ、我等が至大の名譽なれ。今は、水火をも辭すべけむや」と、叫びて、

全軍、また、勇み勇みて、進軍せりとなむ。

その四

ダリウスは、遂に、その臣下のために弑せられぬ。大王の旗下の士、波斯王の死に瀕して、途上にあるを發見せり。苦しき息の下より、波斯王は、一盃の水を乞うて、一息に飲み下し、その兵士に向ひていふやう、われは、汝に、この恩を報ずる時なきを恨とす。されど、汝の大王は、必ず、われに代りて、汝を賞せらるべし。行いて、汝の大王に告げよ、われは、今、こゝに、こゝろよく、我が、全土を大王に捧げまつるべし」と。かく、いひ終へて、遂

に、瞑目せり。大王は、直に、こゝに來給ひぬ。この光景に對して、かぎりなき感慨の念に打たれ給ひけむ、みづから、我が上衣の金絲燦爛たるをぬぎて、そと、波斯王の死屍の上に掛け給ひ、ことばはなくて、そゞろに、暗涙に咽び給ひきとぞ。

二二、高島秋帆

高島茂敦は、通稱を四郎太夫といひ、別號を秋帆と稱ふ。世々、長崎に住みて、町年寄を勤めし家柄なりければ、秋帆も、はやくより、父に代りて、取締代勤となり

ぬ。任に上るはじめ、秋帆、西の國に種痘といふ術あり、この法を施さば、天然痘を免るべしと、傳へ聞き、蘭人にあつらへて、その種を求め、試みしに、果して、効ありき。これ、わが國に、種痘といふ事の、出來しはじめにて、天保七年のことなりけり。

その後、取締役に進み、石火矢、臺場などの事を知り、外國人と商する掟を改め、時の弊を矯めし事ども、いと多し。秋帆、蘭人に就きて、外國の狀を聞き知るまゝに、御國に、砲術の開けぬ事を、深く、憂ひ、私の財を以て、カノンなどいふ種々の砲をはじめ、兵書、器械を、蘭人

より購ひ、通事を集めて、研究せしかど、靴を隔て、痒きところを搔くとかいふ如き心地して、辨へがたき事ねほかりしに、その頃、ヒレニコウへとて、砲術に長けたる蘭人渡り來りしかば、就きて、その秘訣を傳へたり。

天保十二年、幕府の命により、武藏の徳丸原にて、砲術を演ぜしに、秋帆父子、各、一隊を率ゐ、砲隊に令して、大砲を點發せしめ、銃隊を指揮して、進退せしむ。彈力の強き、隊伍の整ひたるなど、これまでの砲術にたぐふべくもあらざりければ、白銀二百枚を賜ひ、格をす

ゝめ、扶持を増し、その功勞を賞せられ、下曾根金三郎、江川太郎左衛門の二人に命じて、秋帆に學ばしめき。この頃、江戸の町奉行に、鳥居甲斐守といへる人ありき。この人、蘭學の、やうやう、興らむとするを忌みて、蘭學する人々を讒せしにより、秋帆も、思はぬ咎にかゝりて、江戸の獄に繋がれ、後には、大名預となりて、十二箇年ありけり。嘉永六年、亞米利加の軍艦、相模の浦賀に來りしより、人々、守禦の備なきに心づき、秋帆の識世のつねならぬも知られ、ゆるされて、海防の任にあたり、大砲を鑄る職に就き、後に、講武所砲術師範役と

なりぬ。

當時、外國の事知れる人、いと少かりければ、かの國人とだにいへば、無下に、忌み嫌ひしを、秋帆は、彼に交らぬは、公道に、背き、御國のためにあしかりなむと、いひ争ひき。されば、秋帆の説は、ことごとく、行はれざりしかど、砲術のみは、廣く、世に用ゐられて、世の人、これを、火技の中興、洋兵の開祖なりと、評しあへり。秋帆、慶應二年、齡六十九にて、身まかりぬ。(細川潤次郎著秋帆高島先生年譜)

二三、 著譯

余が文章の概して、平易にして、讀みやすきは、世間の評論、既に、これをゆるし、余も、また、自ら、信じて、疑はざるなり。今、その由來をのべむに、四十餘年前、余は、大阪の大學醫緒方洪庵先生の門にありき。先生は、平生、溫厚篤實、客に接するにも、門生を率ゐるにも、諄々として、倦まず、誠に、たぐひ稀なる高德の君子なりしが、一旦、文事に臨む時は、きはめて、大膽にして、その議論には、毎度、人の驚くことありき。當時、上國にて、蘭學の大家といへば、まづ、先生一人にして、門生、常に、門に滿

ち、著譯の書甚だ多かり。さて、また江戸の方には、蘭學を以て、門戸を張るもの多かりし中に、最も有名なりしは、杉田成卿先生なりき。この人は、眞實無垢の學者にして、その蘭書を翻譯するには、用意周到、一字一句を苟もせず、字句文章、極めて高尚に、ふと、讀み下したるのみにては、容易に解すべからずと雖も、熟讀する時は、趣味、津々として、盡きざるものあり。

この二先生は、東西學問の兩大關にして、名望、學識、共に、相下らず。夫かして、その翻譯の風に至りては、徹頭徹尾、正反對なり。緒方先生は、和蘭の文法にあきら

かにして、その難文を解釋するは、最も得意なれども、翻譯の一段にいたれば、一向、字句にかゝはらず、殆ど、原書を輕蔑して、眼中にねかざりしなり。先生、常に、門生に向ひて、翻譯は、原書を讀み得ぬ人のためにする業なり。然るに、譯書中、無用の難文字を臚列して、一讀再讀、なほ、意味を解するに難きものあり。こは、これ、原書に拘泥して、無理に、漢文字を用ゐむとする罪にして、その極、譯書と原書とを對照せざれば、解すべからざるものあるに至るは、甚だ、笑ふべきなり」と、いはれぬ。門生の一人に、坪井信良といふ者あり。ある時、遠方

にて、何か翻譯したりとて、先生の許に、草稿を送りて、校閲を乞ひけるに、先生は、朱筆を把りて、まきりに、これを、添刪しつゝあり。余は、偶、先生の傍に居合せ、親しく、様子を窺ふに、先生の机上には、原書なくして、たゞ、翻譯草稿を添刪するのみ。原書を見ずして、翻譯書に手を下すは、蓋し、先生一人ならむ。その、文事に大膽なること、實に、驚くべきにあらずや。

その頃、余は、塾に居て、蘭人ペル著の築城書を翻譯してありしが、或日、先生、余に向ひ、今、足下の翻譯する築城書は、兵書なり。兵書は、武家の用にして、武家のた

めに譯するものなり。就ては、精々、文字に注意して、決して、難解の文字を用ゐる勿れ。その故は、日本國中に、武家多しと雖も、大抵は、無學不文の輩のみにて、難解の文字は、禁物なり。足下などは、年こそわかけれ、まづ、字を知る學者なり。この、字を知る學者が、洋書を翻譯するに、難字難文を用ゐば、唯、徒に、讀者の迷惑たらむのみ。故に、翻譯の文字は、單に、足下の知るだけをかぎりとして、玉篇、又は、雜事類編などは、詮議すること勿れ、といはれぬ。余は、深く、これを、心に銘して、爾來、曾て、忘るゝことなく、文を草するに當り、思はず、筆端に、難

文字の現はれむとすることあれば、直に、これを改むるを例とせり。たとへば、築城書の一節に、應有の材料云々と記して、心窃に、平ならず、早速、有合の品云々と改めて、始めて、満足したるが如き、これなり。思へば、余が著譯の、始終、平易なるは、まことに、先生の賜物なり。こゝに、一言して、世の難字難文を用ゐる著譯者を戒む。(福澤諭吉著福澤全集)

二四 わが遭厄

遭厄の中に、最も、堪へがたく、又、成功の期に近づき

て、大に、この業を妨げつるは、たのれが妻と子との失せつる事なりけり。こゝには、不用にもあり、くだくだしうもあれど、たのれの身に取りては、この書の刊行中の災厄とて、最も、後の思出とならむ事なるべければ、人の見る目にも恥ぢず、記しつけられたかむとす。

去々年十一月に生れたる、たのが次女の、忍みといへる、生れてより、いとすこやかなりしが、去年十月の二十日ばかりより、感冒して、のちに、結核性腦膜炎とはなりぬ。醫高松氏が病院に、妻、小婢と共に託せしに、病性、よからずして、心をなやましめ、朝夕に行きては、

いたはしき顔をまもり、歸りては、筆をとれども、心も心ならず。十一月十六日の、まだ宵のまに、まさに、原稿の「ゆ」の部を訂正して、筆のたし手の「ゆしあんずるに」「ゆのね、ふかうすましたり」などいふ條を推考せるをりに、小婢、病院より馳せ歸りきて、家に入りて、物をもいはず、そのまゝ、うち伏し、聲立て、泣く。病の危篤なるを告ぐるなり。筆をなげうち、蹶起して、走りゆけば、煩悶しつゝ、やがて、こと切れぬ。泣く泣く、屍をいだきて、家に歸り、床に安して、さて、志めやかに、青き燈の下に、勉めて、再び、机に就けば、稿本は、開きて、故の如し。見

れば、源氏の物語、若菜の卷、さりとも、琴ばかりは、弾き取り給ひつらむ云々。晝は、いと、人志げく、なほ、ひとたびも、ゆしあんずるいとまも、心あわたしければ、夜々なむ、志づかに云々。「ゆは、搖ることなり、あんずるは、按ずるにて、左手にて、絃を搖り押すなり。又、紅葉の賀の卷、箏の琴は、云々。いと、うつくしう、弾き給ふ。ちひさき御程に、さしやりて、ゆし給ふ御手つき、いと、うつくしければ、たのれが思ひなしにや、讀むにえたへて、机たしやりぬ。この夜、一夜、たのれが胸は、ゆしあんぜられて、夢を結ばず。死にし子、顔よかりき、をんな子のた

めには、親をさなくなりぬべしなど、紀氏の書き残されたりつるを、さみし思へることもありしに、今は、わが身の上なり、宜なりなど、思ひなりぬ。

この小兒の病に、心を痛めつるにや、うちつゞきて、家のうちに、母にてたはする人をはじめとして、病に臥すもの、五人に及びぬ。妻なるいよ、なげきのなかにも、ひとり、かひがひしく、人々の看病してありしに、妻も、遂に、この月の末つかたより、病に臥しぬ。初は、何の病ともみとめかねたるに、數日の後、腸窒扶斯なりとの診断を聞きて、たどろきて、本郷なる大學病院に移

して、また、晝に、夜に、ゆきかよひて、病をみ、病のひまをうかよひては、歸りて、校訂の業に就けども、心は、こゝにあらず。洋醫ベルツ氏も、心をつくされけれど、遂に、十二月二十一日に、三十歳にて、はかなくなりぬ。いかなる故にてか、かゝる病にはかゝりつらむ。年頃、よく、母に事へ、われに事へ、この頃のわが辛勤を察して、よそながら、いたく、心をいため、はた、家政の苦慮を、われにたよぼすまじと、ひとり、思をなやまして、まかなひつゝ、ありけるさまなりしに、子のなげきをさへ添へつれば、それら、やうやう、身の衰弱の種とはなりつら

む。さては、子の失せつるも、衰弱せる母の乳にや、もと
ゐしつらむ。あゝ、今の苦境も、後に、いつか、笑ひつゝ語
らはむなど、かたらひたりしに、今は、そのかひなし。
半生にして、伉儷を喪ひ、かさなる歎に、この前後數
日は、筆執る力も出でず、強ひて、稿本にむかへば、あな
にく、ろの部、ろめい(露命)などいふ語に出であふぞ、袖
の露なる。卷を掩ひて、寢に就けば、角枕は、また、粲たり。
そも、かゝる、めゝしく、をぢなき心を、ことごとしう書
いつけたかむは、人わらはれなるわざにて、はぢがま
しきかぎりなれど、この頃の筆硯の苦、人情の苦に、窮

措大が囊中の苦さへ、湊合しつる事なれば、後に、この
書を見むごとに、たのれひとり思ひやりとせむと
てなり。讀まむ人は、あはれとも、見ゆるし給へや。(大槻
文彦著言海跋抄録)

二五、畫工と花賣

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく、突き立ちた
る、女神バワリヤの像は、先王、ルードキヒ第一世が、こ
の凱旋門に据ゑさせしなりといふ。その下より、ルー
ドキヒ町を、左に折れたる處に、トリエント産の大理

石にて築きたこしたるたほ家あり。これ、バワリヤの首府に、名高き見ものなる美術學校なり。校長ピロッチイの名は、あちこちに鳴り響きて、獨逸の國々は、いふもさらなり、新希臘、伊太利、璉馬などよりも、こゝに來りつどへる彫工、畫家、數を知らず。日課を終へて後は、學校の向なるカツフェー、ミネルワといふ店に入りて、咖啡飲み、酒酌みかはしなどして、たもひたもひの戯す。こよひも、瓦斯燈の光、半ばひらきたる窓に映じて、内には、笑ひさゝめく聲聞ゆるをり、門に來かゝりたる二人あり。

先に立ちたるは、かち色の髪のそゞげたるを厭はず、幅廣き襟飾、斜に、結びたるさま、誰が目にも、ところの美術書生と見ゆるなるべし。立ちとゞまりて、後なる色黒き小男に向ひ、こゝなり」といひて、戸口をあけぬ。

先づ、二人の面を撲つは、烟草の烟にて、遽に、入りたる目には、中なる人をも、見わきがたし。日は、暮れたれど、暑き頃なるに、窓、悉く、あけ放ちはせで、かゝる烟の中に居るも、習となりたるなるべし。

「エキステルならずや、いつの間にか歸りし」と、口々

に呼ぶを聞けば、彼の書生は、この群にて、馴染あるものならむ。その間、あたりなる客は、珍らしげに、後につきて、入り來れる男を見つめたり。見つめらるゝ人は、座客の無禮なるを厭ひてか、去ばし、眉根に、皺寄せたりしが、とばかり、思ひかへしゝにや、僅に、笑を帯びて、一座を見渡しぬ。

この人は、今着きし汽車にて、ドレスデンより來にければ、茶店のさまの、かしことこゝと殊なるに、目を注ぎぬ。裸なる卓に倚れる客の前に据ゑたる、土やきの盃あり。盃は、圓筒形にて、爛德利四つ五つも併せた

る大さなるに、弓なりの取手つけて、金蓋を蝶づかひに作りて、覆ひたり。客なき卓に、咖啡碗わいたるを見れば、みな、倒に伏せて、絲敷の上に、砂糖幾塊か盛れる小皿、載せたるも、をかし。

客は、みなりも、言葉も、さまざまなれど、髪もけづらず、服も整へぬは、一樣なり。されど、あながち、卑しくも見えぬは、流石、理想世界に遊ぶやからなればならむ。「人々聞け、けふ、このミネルワの仲間に入れむとて、伴ひたるは、巨勢君とて、遠き日本（ヤマト）の畫工なり」と、エキステルに紹介せられて、つき來ぬる男の、近寄りて、會

釋するに、起ちて、名乗りなどするは、外國人のみ。さらぬは、坐したるまゝにて答ふれど、侮りたるにもあらず。この仲間の癖なるべし。

エキステル、重ねて、わが、ドレスデンなる親族訪ねにゆきしは、人々も知りたり。巨勢君には、かしこなる畫堂にて逢ひ、それより、交を結びて、こたび、巨勢君、こなる美術學校に、去ばし、足を駐めむとて、旅立ち給ふをり、われも、ともに、かへり路に上りぬ」といへば、人々は、巨勢に向ひて、はるばる來ぬる人と、相識れるよろこびを陳べ、さて、大學には、御國人も、をりをり、見ゆ

れど、美術學校に來給ふは、君が、はじめなり。今日、着き給ひしことなれば、ピナコテーク、また、美術會の畫堂なども、まだ、見給はじ。されど、よそにて見給ひしところにて、南獨逸の畫を、何とか見給ふ。こたび、來給ひし君が、目的は、如何など、口々に問ふ。

巨勢は、調子こそ異様なれ、拙からぬ獨逸語にて、語り出でぬ。

わが、ミュンヘンにきたりしは、この度を始とせず。六年前に、こゝを過ぎて、ザクセンにゆきぬ。そのをりは、ピナコテークに懸けたる畫を見しのみにて、

學校の人々などに、交を結ぶことを得ざりき。そは、故郷を出でし時より、目あてなるドレスデンの畫堂へ行かむと、心のみ急がれしゆゑなり。されど、再び、こゝに來て、君等がまとゐに入ることゝなりしその因縁をば、早く、當時に結びぬ。

れとなげなしと、いひけたで、聞き給へ。謝肉の祭はつる日のことなりき。ピナコテークの館出でし時は、雪、いま晴れて、街の中道なる並木の枝は、ひとつひとつ、薄き氷にて、つゝ、まれたるが、いま、點ぜし街燈に映じたり。いろいろの風したる衣を着て、白く、

また、黒き百眼ひやくまなこ掛けたる人、群をなして、往來し、こゝかしこなる窓には、毛氈垂れて、物見と志たり。カールの辻なるカフフェー、オリヤンに入りて見れば、おもひたもひの假裝色をあらそひ、中に雜りし常の衣も、はえある心地す。皆、これ、コロッセウム、井クトリヤなどいふ舞踏場のおくを、待ちたるなるべし。われも、片隅なる一榻に、腰掛けて、にぎはしきさまを、うち見る程に、門の戸あけて入りしは、きたなげなる十五ばかりの伊太利栗うりにて、焼栗盛りたる紙筒を、堆く積みたる箱かいこみ、栗めせ、君と、呼

ぶ聲も勇ましき後につきて入りしは、十二三と見ゆる女の子なりき。舊びたる頭巾、ふかぶかと被り、凍えて、赤うなりし兩手さしのべて、淺き目籠の縁を持ちたり。目籠には、常磐木の葉、敷きかさねて、その上に、時ならぬ堇花の束を、愛らしく結びたるを、載せたり。すみれめせと、うなだれたる首を擡げもあへで、いひし聲の清さ、今に忘れず。この童と女の子と、道連とは見えねば、童の入るを待ちて、これを志ほに、女の子は來りしならむと、おもはれぬ。この二人のさまのことなるは、早く、わが眼を射き。

人を人ともおもはぬ、にくさげなる栗うり、やさしく、いとほしげなる堇花うり、いづれも、群れ居る人の間を分けて、座敷の真中、帳場の前あたりまで來し頃、そこに休み居たる大學々生らしき男の連れたる、英吉利種の大狗、いまままで、腹ばひ居たりしが、身を起して、脊をくぼめ、四足を伸し、栗箱に鼻さし入れつ。それと見て、童の拂ひのけむとするに、驚きたる狗、あとにつきて來し女の子に突き當れば、あなやと、わびえて、手に持ちし目籠、とり落したり。莖に、錫紙卷きたる、美しき堇の花束、きらきらと光り

て、よもに、散りばふを、好き物得つと、彼の狗、踏み
じりては、啣へて、引きちぎりなどす。床は、暖爐のぬ
くまりに解けたる、靴の雪にぬれたれば、あたりの
人々、かれ笑ひ、これ罵るひまに、落花狼藉、なごりな
く、泥土に委ねたり。栗うりの童は、逸足出して、逃げ
去り、學生らしき男は、欠しながら、狗を叱し、女の子
は、呆れて、うちまもりたり。この董花うりの、忍びて
泣かぬは、うきになれて、涙の泉、涸れたりしか、さら
ずば、驚き惑ひて、一日の生計、これがために止まむ
とまでは、想ひ到らざりしか。志ばしありて、女の子

は、くだけ残りたる花束、二つ三つ、力なげに、拾はむ
とする時、帳場の女の知らせに、こゝの主人出でぬ。
赤顔にて、腹突き出したる男の、白き前垂したるな
り。太き拳を腰にあて、花うりの子を、志ばし睨み、
「わが店にては、暖簾師めいたるあきなひ、せさせぬ
が定なり。とく、行きぬ」と、わめきぬ。女の子は、たゞ、こ
とばなくて、出で行くを、滿堂の百眼、一點の涙なく、
見送りぬ。

われは、咖啡代の白銅貨を、帳場の石のうへになげ、
外套取つて、馳せ出で見しに、花うりの子は、ひとり、

去く去くと泣きてゆくを、呼べど、顧みず。追ひつき
て、いかに、よき子、堇花の代取らせむと、いふを聞き
て、はじめて、仰ぎ見つ。そのれもての美しさ、濃き藍
いろの目には、そこひ知らぬ愛ありて、一たび、顧み
る時は、人の腸を斷たむとす。囊中のマルク、七つ八
つありしを、から籠の木の葉の上に置きて與へ、驚
きて、何ともいはぬひまに、立ち去りしが、その面、そ
の目、いつまでも、目につきて、消えず。ドレスデンに
ゆきて、畫堂の額うつすべき許を得て、いづれの圖
に向ひても、不思議や、堇花うりのかほばせ、霧の如

く、われと畫額との間に立ちて、障礙をなせり。かく
ては、所詮、我が業の進まむこと、覺束なしと、旅店の
二階に籠りて、長椅子の覆革に、穴あけむとせし頃
もありしが、一朝、大勇猛心を奮ひたこして、わがあ
らむ限の力をこめて、この花うりの娘の姿を、無窮
に傳へむと、たもひたちぬ。さりけれど、わが見し花
うりの目、春潮を眺むる喜の色あるにあらず、暮雲
を送る夢見心あるにあらず、伊太利古跡の間に立
たせて、あたりには、一群の白鳩飛ばせむこと、ふさは
しからず。わが空想は、かの少女を、ライン河の岸の

巖根に居らせて、手に一張の琴をとらせ、嗚咽の聲を出させむと、おもひ定めき。かくて、下なる流に、われ一葉の舟を泛べて、かなたへ向きて、手高く舉げ、面にかぎりなき愛を見せ、舟のめぐりには、數知られぬ、ニツクセン、ニユムフェンなどの形、波間より出でて、擲掄するさまをあらはさむとす。けふ、このミエンヘンの府に来て、志ばし、美術學校のアテリエ借らむとするも、行李の中、たゞ、この一畫稿、これを、御身等師友の間に議りて、なしはてむと願ふのみ。

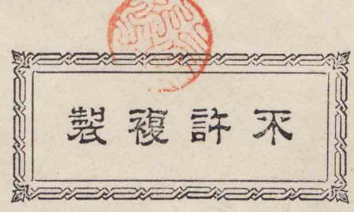
巨勢は、われ志らず、はなしいりて、かく、いひ畢へし時

は、モンゴリヤ形の狭き目も、光るばかりなりき。いしくも、語りけるかなと、呼ぶもの、二人三人、エキステルは、笑ひて、聞き居たりしが、汝たちも、その圖、見にゆけ。一週が程には、巨勢君のアテリエと、のふべきに、といひき。(森林太郎著水沫集)

中等國語讀本卷六終

明治三十四年十一月十五日 印刷
 明治三十四年十一月十九日 發行
 明治三十五年二月四日 訂正再版印刷
 明治三十五年二月七日 訂正再版發行

明治三十三年五月二十四日
 中學校用文部省檢定



著者 落合直文
 東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地

發行者 三樹一平
 東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 鈴木友三郎
 東京市神田區三河町二丁目十六番地

印刷所 英舍
 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

定價表	
一、二冊	貳拾貳錢
三、四冊	貳拾錢
五、六冊	拾四錢
七、八冊	拾四錢
九、十冊	拾四錢

發行所 明治書院
 東京市神田區錦町一丁目
 (特電話本局二四三八番)

關西專賣 吉岡平助
 大阪市東區備後町四丁目
 (特電話東二四九番)

